

キャッチャーガールの 進路相談

第3話

—恋ちえ



日が少しずつ傾きはじめていた。大通りを走っている途中、県外ナンバーの車と何台もすれ違った。今日がゴールデンウィークの最終日だったことを直子はふいに思い出した。

それでもさすが強豪校だ。しんと静まり返った校舎の裏では、平日に訪問したときと変わらぬ激しい掛け声が聞こえる。直子とブンちゃんはカゴからトロフィーを下ろし、校舎をぐるりと周ってグラウンドに出た。

黒土が敷き詰められたスペースで、レギュラー選手の守備練習が行われていた。投げ込みをする投手とそれを受ける捕手の側に、高坂先生が腕を組んで立っていた。

最初に二人に気付いたのはマネージャーらしき女子だ。この前の二人とはまた違う顔だったが、話は伝わっていたらしく「もしかして選手希望の子？」と、今度は間違えられなかった。

「はい。もう一度監督にお話があります。会わせて下さい」
直子は毅然とした態度で言った。

「恨んで襲撃しに来たわけじゃないよね？」

女子マネージャーは、直子が抱えているブランケットに包まれた長い物体を指差した。直子は布を取ってピカピカのトロフィーを見せた。

「わかった。ちよつと待っていて」

と、彼女は先生を呼びに行ってくれた。

やがて現れた高坂先生は、やや困った顔を浮かべていた。

「話は終わりにしてくれと言ったはずだが」

「今日、市の大会で優勝しました。お願いします！ 来年わたしが入学したら、野球部に選手として入部させて下さい！」

直子は視線を合わせて訴えた。印籠のようにかかげたトロフィーの先端が、西日で眩しく光る。

大丈夫、絶対に許してもらえないはず。むしろ向こうから「ぜひ入部してくれ」と頼まれてもいいくらいだ。監督が黙っているあいだ中、そう自分を励まし続けた。

「君はキャッチャーだと言っていたな。——うちの球、受けてみるか？」

監督はやがて口を開いて言った。

「え？」

「実際に体験してみるといい」

高坂先生は戸惑う直子を促すと、二人を引き連れグラウンドに降りた。トロフィーを持って横切っていく小学生の姿に、練習中の部員たちが次々と振り返る。それはそつだ。

投げ込み練習中のピッチャーを、「水島」と、高坂先生は低い声で呼んだ。

「何球か投げてやってくれ」

「え？ この子にですか？」

水島と呼ばれた少年は、困惑した表情で直子を眺めた。

高坂先生は構わず直子を見て話を進める。「防具もいるな

……。ミットは？」

「あ、あります！」

「そうか。じゃあ、あっちの捕手からその他の物を借りてくれ」
直子は戸惑いつつもブンちゃんにトロフィーを預け、言われた通り防具を装着した。

ようするに入部テストってヤツだろう。ならばどんとこいだ。
だ。

「だいじょうぶ？」

ブンちゃんが心配そうに囁いた。

「なにが？」

「中学生の球なんて捕ったことないでしょう」

「大丈夫だよ。やることは同じだから」

恐れることなど何もなかった。それどころか直子は高揚感に包まれていた。

用意ができた直子を高坂先生は捕手のいた場所にしゃがませた。一体なにが始まるのかと、部員や女子マネージャーたちがそつとこちらを覗き見ている。

「水島、とりあえずストレートで三球投げてくれ」

「あ、はい。——えっと、いい？」

「はい！ お願いします」

直子は腹から返事をした。いくらでも、何球でも受けてたとう。

水島君が振りかぶる。直子はサツと構え、次の瞬間、ミットにボールが収まっていた。

直子は息を飲んだ。速い。中学生になるとここまで違うのか。

いつも受けている隼人の球が、低学年の子の送球と同等に感じられた。

でも捕れていることには捕れている。速いと感じたのは慣れていないからだ。最初はこんなものだ。直子はそう自分に言い聞かせボールを投げ返した。

そのとき高坂先生が、「水島！」と声を荒げた。

「俺はいつも通り投げろと言ったんだ。手加減するのは相手に失礼だ」

手加減？

直子は目を見開いた。

水島君は高坂先生に向かって、「すみません。女子だし、ついでと謝っている。」

今のが、手加減？

心臓が、どくどくと強く脈打ちはじめる。手を抜かれているだなんてちつとも気付かなかった。直子はミットの上から左手を擦った。

「ごめん！ もう一回お願いします！」

水島君はこちらが動揺していることには気付かず、一呼吸置いてゆつくりと片足を振り上げた。

その球は、先ほどとは全く違った。

ずどん、と頭の上で打ち上げ火花が上がったような衝撃だ。直子はキャッチした瞬間、思わず目を瞑っていた。そして瞼を持ち上げたとき視界にあったのは、足元に無造作に転がって

るボールだ。

「そんな……」

捕り損ねた。いや違う。一度は捕れたけれど衝撃で掴んでいられなかったのだ。ストリートだったのに。まっすぐこの手の中に飛び込んできたのに。

動けずにいる直子の前に高坂先生がしゃがんだ。直子にミットを外させ、ジンジンする手の平にそつと触れてくる。

「痛いかな？」

「……」

痛い。でも、肯定してしまうと、全てが終わってしまいそうで答えられない。

唇を噛む直子に、高坂先生は「よく聞きなさい」と静かに言った。

「優勝するにはそれなりの才能と努力が必要だ。だから君の情熱は認めたい。しかしここでやっていくには、女子ではどうしても限界がある。人間の構造上、男子のようにはなれない部分があるということだ。君がここでレギュラーを取るのは無理だろう。万が一に取れたとしても、試合になれば今の球を五十球以上受けることになる。——だから、もう一度訊く。痛いか？」

直子は少しためらったあと、今度は正直に頷いた。

「……痛いですが」

「そうか」

高坂先生は直子と視線を合わせ、継ぎ足すように言った。

「君には、君の活躍する場所が他にもあるはずだ」

直子は突然暗闇に放り投げられたような気分になった。他の場所？ 今自分がいる場所もわからなくなりそうなのに、どうやってそれを探せばいいのだろう。

直子はしばらく俯いていたが、訊ねるべきことを見つけてゆるゆると口を開いた。

「……一つ、教えてください。ここにいた柴崎由紀さんは、最初からマネージャー希望でしたか？」

「君は柴崎と知り合いなのか？」

高坂先生は一瞬黒目を大きくしたが、直子が頷くと「そうか」と表情を和らげた。

「ああ。柴崎は最初からマネージャー希望だった。ここで自分に何ができるのか知っていたんだろう」

直子とブンちゃんは黙々と自転車をこいで、駅前の《マル屋》に向かっていた。気分は最悪だ。向かい風で進みづらしいし、カゴに乗せたトロフィーでハンドルがぐらつくし、後ろを走っているブンちゃんが黙ったままなのだ。

「もうやだ。行きたくない」

通りにお好み焼き屋の暖簾れんが見えてきたところで、直子は堪らなくなつて自転車を降りた。

「直ちゃん」

「わたし行かないから。これ、ブンちゃんが返して来て」

今の状態で、どんちゃん騒ぎがおこなわれる店に入るなんて考えられない。

トロフィーのビニールひもを解きだす直子に、ブンちゃんは息をついた。

「またそんな……。みんな待つてるんじゃないの？」

「だってもう夢も希望もないんだよ。この先の中学校生活が真っ暗だって知らされた日にお祝いなんてできる？ とにかく今日はもう行かないから。皆と顔合わせたくもない」

「真っ暗ってまだ二中もあるんだし。あつちは受け入れてくれるって言ったんでしょ」

ブンちゃんの話は直子を余計苛立たせた。どんなに第一中学に入りたかったかブンちゃんにはわからないのだろう。

「二中の野球部に入るくらいなら、野球やめた方がマシ！」

「……直ちゃん、冗談でも言い過ぎ」

「冗談じゃない！ 本当のことだもん！」

直子はイライラとヒモを引っ張った。

「せいぜい2回戦止まりの部に入って何の意味があるの？ あたしはもつと大きな試合で活躍したかったの。今日みたいにくさん優勝して、表彰台に上がりたいの！」

「……本当にそれだけ？ 優勝したいだけ？」

「当たり前でしょ。勝つから楽しいのに、弱いチームに入っちゃって全然意味ない！」

全部のヒモをほどいた直子は、ブンちゃんの自転車かごにト

ロフィーを入れようとざっと振り返り、——そこで足を止めた。ブンちゃんがひんやりとした目で直子を見ていた。

「ブンちゃん」

「そんなふうにしてたのなら、手伝わなければよかった」

ブンちゃんの声は冷たかった。多少無茶をしても、「仕方ないな」と呆れ笑いをしてくれていた幼馴染みは、もうこの世から消えてしまったように思えた。

わたしのせいで？

「し、勝負なんだよ！ 勝ちたいと思うのがそんなに悪い!?」

「悪くはないよ。でも勝つだけの試合なんて虚しいと思っただけ」

虚しい？ 何が？

「意味がわからない！」

直子は泣きそうになるのを誤魔化すために叫んだ。

「だいたい本ばかり読んで試合に出たことも無いブンちゃんに色々言われたくない！ こっちは一つでも多く勝つために練習してるのに！」

「だからそうじゃなくて」

「そんなふうだから二年以上も通ってるのに全然上手くならないんだよ！ 低学年の子にも負けて恥ずかしくないの!? 虚しいのはブンちゃんの方だよ！ 今まで練習に費やした時間、全部無駄にしているんだから！」

直子は一気にまくし立ててから、自分の失言に気付いて顔を

上げた。

そのとき《マル屋》の戸が勢いよく開け放たれ、店の中から監督が顔を出した。

「お前ら何騒いでるんだ？ ほら、早く入れ！」

助かった、と思ってしまうた。

「あ、はい」

直子が振り返って返事をしているすきに、ブンちゃんはくると自転車の向きを逆転させた。

「帰る」

「……ブンちゃんが、行けっていったのに」

違う。喧嘩をふっかけている場合ではない。今すぐ謝らなければ。そう思っているのに言葉が出てこなかった。なんと謝ればいいのか見当がつかないのだ。

「じゃあね」

ブンちゃんは背を向けたまま言った。そして本当に帰ってしまった。

外に出て来た監督が、直子の隣に並んで頭をかいた。

「どうした、喧嘩か？」

直子は答えず、手に持っていたトロフィーを監督に押し付けた。

「わたしも帰ります」

「お、おい。そんなこと言わずに食べていけよ」

「お腹すいてないんです」

嘘じゃない。胸がいつぱいで胃を圧迫していた。直子は監督を残してブンちゃんとは別の道を選んで帰った。

去年は二位でも十分嬉しかったのに、優勝した今年の方が気分最悪だなんて、去年の自分には想像もつかなかったことだろう。

幼馴染みの厄介な所は、嬉しいことがあっても悲しいことがあっても、毎日顔を合わせなければならぬ所だ。そもそもブンちゃんとは家が隣でクラスまで同じだ。ひきこもる以外に合わない方法はない。

もちろん登校拒否になるわけにもいかず、直子はいつも通り登校した。昨日の優勝に関しては先に来ていたアッキーからクラスメイトたちに伝わっていて、直子は教室に入った途端、「おめでとー！」と声をそろえた女子たちに祝福された。

「やったじゃん。念願の優勝だね！」

「可部井さん運動神経いいもんね。ドッチもバスケも上手いし」

「四年生のときからレギュラーだっけ？ 男子ばかりなのにすぎいよね！」

褒めてもらって嬉しいと思いつつも、直子は心ここにあらずだ。窓際の席で本を読んでいる幼馴染みが気になり、どうしても目がそちらにいつてしまう。

そんなブンちゃんの元に、ふらふらとアッキーが近づいているのが見えた。「昨日なんで来なかったんだよ」と詰め寄る声

が聞こえてくる。もともと声が大きいのだ。

「可部井も！ なんて来なかったの？ デート？」

アッキーは直子の方を見て、教室の端から端まで聞こえる声で訊ねた。

……今日ばかりは本気で止めてほしい。

直子がアッキーを呪っていると、ブンちゃんがふいと顔を上げてこちらを見た。一瞬目が合ってしまった、思わず視線を逸らす。気まずい。これ以上なく、気まずい。

「可部井さん、中村君と何かあったの？」

周りの女子たちもつられて好奇心を発動させる。だから嫌なのだ。

「なにも無いよ」

ブンちゃんの前でこれ以上この話題に触れなくなかった。直子が適当に誤魔化していると、なぜか最終的に「二人が付き合いだした」という噂話に行き着いた。これまで散々一緒に登下校してきたのに、今さら、しかも喧嘩中にそういう流れになったことが一番驚きだ。

放課後、直子は船津オリオンの練習に出向いた。正直行くか迷ったが、これ以上変な噂をたてられないようにするためだ。

しかしキャッチボールになった途端、隼人までもが「中村と何かあったの？」と、こっそりと訊ねてきた。隼人と直子たちは別のクラスである。

「まさかそっちまで噂広まっているの？」

「噂？ 昨日二人だけ来なかったから、なんでかと思って思ったんだけど。……何の噂？」

「なんでも」

直子は黙って隼人の球を受け止めた。

遅い。

そんなふうにしたことは一度も無かったのに、中学生のストライクをくらった後ではどうしても比較してしまう。それも第一中学に行く隼人は、いずれあのエースのような球を放れるようになるのだろうか。

じゃあ、わたしは？

ブンちゃんの冷たい声の中で繰り返される。

優勝しただけ？

そう、第一中学に入って、レギュラーになって大活躍して、優勝しただけだ。他に何があるっていうんだろう。

「すみません！ 捕って下さい！」

そのとき高い呼び声とともに、二人の間に向かってボールが転がって来た。向こうで練習をしていた低学年の子が、慌ててこちらに走って来るのが見える。

「まかせて！」

と、球をすくい上げた直子だが、グラブの中は空っぽだった。振り返るとボールは地面の上を弾みながら、さらに後ろへ転がっていた。

「……あ、あれ？」

「おーい、何やってんだよ」

隼人が呆れたように笑って、直子が捕り損ねたボールを追いかけた。その間に追ってきた少年二人が直子の元に辿り着く。練習を見てほしいと最初に頼んできた、健太と勇樹の二人だった。

「ごめん、いま隼人が捕ってくるから」

直子は自分が捕り逃したとも言えず、曖昧に笑って誤魔化した。さつきから感じていたことだが、今日はかなり調子が悪い。余計なことで頭がいっぱいになっているせいかもしれない。

モヤモヤしている直子の前で、「あの！」と、二人がいきなり帽子を脱いだ。

「練習見てくれて、ありがとうございます」

「ありがとうございます！」

突然の勢いよく礼を言われ直子は慌てた。そういえば低学年チームは負けたのだ。

「あっ、試合残念だったね。ごめん、勝たせてあげられなくて」

二人は帽子をかぶり直し、顔を見合せて笑った。

「負けたけど楽しかったよな」

「うん、楽しかった。早く次の試合こないかな」

「……でも悔しかったでしょ？」

目の前の晴れやかな表情に、直子は気持がむずむずした。こんな笑顔は試合に勝ってはじめて浮かぶものだと思っていたからだ。

「悔しかったです。でも、みんなとチーム作れて嬉しかったです」

気真面目に答える健太。隣で勇樹が、「お前、ちよつと泣いてたじゃん」とヒジで小突いた。

「言うなよな」

「いいじゃん。それより西ちゃんの走り、すごかったよなあ」

「うん、すごかった。あ、それよりあつちにやたらデカイ奴がいたじゃん？ 三年生には見えなかったよな」

「2回のあつちの攻撃のとき、健太がさあ」

「えー、そんなの無理。だって」

夢中になって反省会をはじめた二人。本当に楽しかったのだろう。

「大会、出てよかったね」

直子が言う二人はにこつと笑った。

「はい！ ありがとうございます」

「また練習してもらえますか？」

「うん。いいよ」

「よかった。あ、中村君にもお礼言わなきゃ」

「次に来るのつて水曜日ですか？」

「うん……。あさつて」

直子との仲直りが済んでいたらの話だが。

そのとき、隼人がボールを拾って戻ってきた。

「ほれ、気いつける」

「あ、ありがとうございます！」

二人はもう一度頭を下げて、跳ねるようにして駆けていく。それを見ながら、

「お前も気いつけるよ！」

と隼人が言った。

「なんかぼーっとしてるみたいだけど、大丈夫か？ 疲れてるんなら帰ったほうがいいんじゃない？ あれ、中村？」

隼人は話の途中で視線を直子の背後に移動させた。まさかと思いきや直子は振り返る。本当だった。グリーンフェンスの向こう側にブンちゃんが立っていた。

「中村！」

隼人は人の気も知らずに大声で名前を呼んだ。ブンちゃんのはっとした仕草をし、くると背を向けて行ってしまふ。

「……無視かよ。大会の礼でも言おうと思ったのに。——って、可部井？」

「ちよっと一人でやってて！」

直子は隼人をほっぽって走だし、フェンス越しにブンちゃんを呼び止めた。

「ブンちゃん待って！」

聞こえているはずなのにブンちゃんは止まらなかつた。直子は腹から声を張り上げた。

「今すぐ戻って来ないと、小一の時ははずかしい秘密ばらすから！」

住宅の角を曲がりかけていたブンちゃんはぴたりと足を止めた。それから回れ右をして、神妙な顔でフェンスの前に戻ってきた。

「秘密ってなんだっけ」

「あ、ごめん、嘘」

「……さよなら」

再び離れようとするブンちゃんに直子はすかさず言った。

「昨日はごめん！ 八つ当たりみたいにひどいこと言って！」

「……」

「ブンちゃんはいつまでたつても下手くそだけど、頑張ってるわけじゃなかったの？」

「——大きなお世話だよ」

背を向けていたブンちゃんは、一息ついてから振り返った。

「あと下手くそは余計」

「うん、ごめん」

「別にいいけど。……野球、辞めないよね」

「え？」

「いやだから、昨日、もう辞めるとか言ってたから」

「もしかして、それ確かめに来たの？」

ブンちゃんは答えなかつた。目をそらし、直子の後ろで練習している船津オリオンに視線を向ける。直子も追いかけるようにグラウンドを見渡した。

そこにいるのは、ずっと一緒にプレーしてきたチームメイト

たちだ。クラスも学年も、学校さえ違う子もいる。試合に負けて泣いたことも、いくら言われても治らない癖も、将来の夢も知っている。

「直ちゃんが補欠で出た最初の試合、ボロ負けしたの覚えてる？」

ブンちゃんは相変わらず目をそらしたまま、ぼつりとつぶやいた。

「覚えてるよ。あれ、ひどかったもん」

直子の部屋に貼ってある集合写真がその時のものだ。ユキちゃんと一緒に戦った最初で最後の試合だったのに、風邪気味の選手やクラブを忘れた選手など不運が重なり、よりにもよって十点差もつけられて負けてしまったのだ。

当時のことを思い出した直子は、ふっと笑いが込み上げた。

「ホント、ひどかったよね。ユキちゃんあれで引退だったからどうしても勝ちたかったのに、悪いことが次々起こってさ。あれこそみんな悔し泣きだった」

「でも直ちゃんの部屋の写真はみんな笑ってた」

「はいチーズ、って言われたからだよ」

「今も笑ってる」

直子はクラブをつけていない左手で頬を擦った。確かにそうだ。あれだけボロ負けしたのに、一番印象に残っているのはユキちゃんと一緒にプレーしたくて練習漬けの日々を送ったことと、試合に出られて楽しかったという気持ちだった。

ただ、優勝したいわけじゃなかった。

ブンちゃんの言った通りだと直子は思った。第一中学に入ることばかりに囚われていたが、直子の中には他にもちゃんと理由があったのだ。

直子はもう一度グラウンドを見つめた。隼人も直子も他の六年生たちも、一年後には中学生になってこのクラブを出ていく。寂しいという気持ちが胸の中に広がる。それと同時に、直子は自分がどうしたいのかようやく掴めたような気がした。

「わたし、一・二中に行こうかな」

「え？」

直子の突然の発言に、ブンちゃんは目を大きく見開いた。

「やっぱり野球好きだし、まだみんなと一緒に試合したい。でもそれが無理なら、ライバルとして戦いたい。もっと上手くなつて一中を追い詰めてやるの」

高坂先生は君には君の場所があると言ってくれた。あれは単に突き放したのではなく、直子の力を埋もれさせないための気遣いだったのだろう。人数が少ない第二中学なら、自分のペースでの練習が可能だ。女子選手の横山さんに今のうちから話を聞いておく手もある。

「昨日勢いで辞めるって言っちゃったけど、いくら考えても辞め方がわからないんだ。だからまだ辞めないことにする」

「いいんじゃない」

ブンちゃんは、静かに言った。

「ホント?」

「うん。ていうか、僕は最初からそうした方がいいって言ってたでしょ」

ブンちゃんは呆れ笑いを浮かべ、

「僕も二中に行こうと思ってた」

と、告白した。

「そうなの!」

「そっちの方が塾も近いし。……野球部も、なんとかついて行けそうな感じだし」

「ホントに? 野球部入るの?」

「三年もやって今のままじゃどうかと思うからね」

「それ、わたしの言ったことに気にしてる?」

直子がフェンス越しに顔を覗き込むと、ブンちゃんは煩わしそうに視線をそらし、「別に、そういうんじゃないけど」と、もごもごと口の中で言った。

「あ、そうそう、二中って男子マネがいるんだよ。ブンちゃん向いてるんじゃない?」

「やだよ。それじゃあ今と一緒でしょ。僕も次は試合に出ることを目指すから」

「レギュラー?」

「いや、補欠くらいで」

ブンちゃんの微妙な謙遜に直子は思わず吹き出した。

「じゃあ今から練習だね。補欠だってなるのは難しいんだから」

「……今日は塾なんだけど」

「あ、そっか。——じゃあまた水曜日」

そろそろ隼人が待ちくたびれているだろう。練習に戻ろうと踵を返す直子に、

「そう言えば」

と、ブンちゃんが緊張した声で言った。

直子は振り返り「うん」と続きを促す。

「えっと、明日の練習行ってもいい? 水曜じゃないけど」

ブンちゃんは相変わらず質問の仕方がぎこちない。

もちろん、と直子は笑った。それからブンちゃんのめずらしく照れた表情を見て、いつか一緒に試合に出る日のことを想像した。

END